

何かを燃やした後のような、そんな焦げ臭いにおいだった。そこで気付いたんだけどね、畔には綺麗な森があつたはずなのに、無くなっていたのよ。火事でもあつたのかしら……。

しょうがないな、と思つてわたしは歩いてみた。

ひとのいる感もしない、何だか作りものめいた空間にも感づられたから、なのかも。もしかしたら、こうして歩けばまたあの館に出会えるかも知れない、つて考えたのか、よく覚えてないんだけど。

とにかく、そうやってわたしはあの紅い館と再会したのよ。

正確に表現するなら――。

紅い館だったもの、つて言えばいいのかしら？

*

「それで、その館は倒壊してた、つて？」

「そういうことね。大地震でもあつたのか、それとも何か――、それこそ戦争でもあつたような壊れ方してた。壊れて、というよりは崩れて、つて言つた方が正確かも。盛大な瓦礫の山、つて表現すべきかしら」

「戦争？ また急に話が変わつたわねえ」

呆れ返つたように蓮子が肩を竦める。わたし自身としても、その表現は到底満足できるものではなかった。とはいえ、わたしが実際に目の当たりにしたのは、文字通り「崩れた」館の残骸だったのだから。

「あそこが街だったら、そう思つても仕方ないような感じだったわよ。何しろ湖の畔には、あの館しかなかったんだもの。そうして、結局誰にも逢わないままで目が覚めちゃつた。誰かに逢えれば、理由を訊くことができたのかも知れないけどね」

「んー、寝る前にロボットもののSF小説でも読んでたんじゃないの」

惜しいわね、昨夜読んでたのは筒井康隆よ、と返して、わたしはポケットに入れていたそれをテーブルの上に放つた。

「そうそう、それでね、これがそのヘビーマタルだかモーターヘッドだかの起動キーっ

「ぼいのよ」

「うん？ ちょっと待ってメリー、ほんとにそんなロボットなんていたの？」

「そんなの分からないわよ。ただ、館の近くに落ちてただけなんだから」

もうひとつ、発見したものがあつたのだが、その点については触れなかった。

館の前に堆く積み重なっていた残骸に、深く突き刺さっていた剣のようなもの。

どう考えても天災の類とは思われなかったけれど、しかしそれでも言うべきではない
と思ひ、わたしは言及を避けた。

それはただ単純に恐ろしかったからである。

異界に迷い込むだの、妖怪に追われるだのには——不本意ではあつたが、馴れていた。
しかしながら、何者かの意識が介入するような異変事には馴れていなかったのだ。

その表情を察してか、蓮子はテーブルに載せられた不可思議なデヴァイスを掴み上げ
ることで返答代わりとしたようだ。

「そういえば、昨夜ね」

聞くだけ聞いて、カウンセリング大会とやらは閉幕したらしい。とはいへ、話題を転

じてくれたことに内心で感謝しつつ、わたしは首肯で応える。

「本棚の整理をしたのよ。それで思い出したんだけど、貴女に貸しっ放しだったのが
いくつかあつてね。覚えてたら返却願いたいんですけども」

「何を借りてたかしら。一応本を売る、捨てるっていう習慣がないから、少なくともう
ちにあることは確かだわ。ただ我が家の本棚もそろそろ限界に近いのよね……」

「シリーズものを並べて、中抜けに気付いたのよ。でもよく考えるところおかしな話よね
え。一巻だとか最終巻が抜けてる、っていうなら理解できるんだけど。ちなみに新装版

『帝都物語』の第参番

「新装版だと……加藤保憲が逃げちゃつてる頃かしら。じゃあ探してみるわ。他にもあ
るんでしょ？」

「気付いた限りでメモは取つてあるわ。でも、わたしも正直なところ全部把握はできて
ないのよねえ。キャロリン・キーンはたぶんメリーに貸してたはずよ」

ふむ、と頷いて、わたしは立ち上がる。

「暇でしょう、うちにきて探してくれるとありがたいわ」